

八重山諸島の考古学

4. もうひとつの先史文化

ここまで、先島諸島最古の土器文化である下田原期について述べてきましたが、地域の特徴をより理解していただくために、宮古諸島にも遺跡が登場する、無土器期についてご紹介します。

(1) 無土器期とは

紀元前後くらいを堺にして、2,000年近い空白期を経て土器を持たない文化—新石器を利用する無土器期が確認されています。この時期は、放射性炭素年代測定の結果、宮古諸島では約2,700年前（アラフ遺跡発掘調査団2003）、八重山諸島では約2,000年（沖縄県教育委員会1979）～1,800年前（沖縄県教育委員会1986）に始まり、終末は中国産白磁碗や長崎産滑石製石鍋、徳之島産カムイヤキが入ってくる時期、12世紀初頭だということが確認されています（沖縄県教育委員会1986、石垣市2009a）。宮古諸島では、八重山諸島の遺跡よりも放射性炭素年代測定の結果が古く出る例が多く、先後関係や遺跡の性格に関する問題が指摘されています。しかしながら、無土器期には両諸島が同じ文化圏に属していたことがわかります。

(2) 無土器期の環境と遺跡の立地

無土器期の遺跡は、石垣島を中心に見た無土器期と、それより前の自然環境に関わる研究から、現在、遺跡が未発見で空白期になっている時期には、礁嶺（干瀬）を伴うサンゴ礁の発生が見られ、その前の時期よりもさらに海産物を求めやすい環境になったと考えられています（河名2009）。同時に、下田原期と無土器期の間には、海岸線が沖側に移動した可能性もあります。つまり、海進・海退の問題、自然災害（津波等）による集落の消滅・移動も含めて、現在発見されていない「先史時代両時期の間の空白期」を考える必要があります、それが今回利用した編年を支持する理由となっています。



図9 <参考>崎枝赤崎遺跡と崎枝赤崎貝塚の立地

先に、無土器期の遺跡は、宮古諸島でも見つかることを紹介しました。宮古諸島では、これまでに8遺跡が確認されており、中でも発掘調査が実施された浦底遺跡、アラフ遺跡、長間底遺跡、島尻・南嶺の長墓遺跡が有名です。また、平成24年度末に発掘された、友利元島では、下層から無土器期と思われる包含層が確認されたという報告もあり、本報告が待たれるところですが、それを加えると、9遺跡となります（久貝ほか2013）。八重山諸島では無土器期の（または、無土器期の可能性がある）遺跡は、51～52遺跡あり（石垣市2009aに新発見の遺跡を追加した数）、遺跡の分布が広がっただけではなく、両諸島の遺跡数を合計すると下田原期の遺跡に比して3倍以上の数となっています。

先に、無土器期の遺跡は、宮古諸島でも見つかることを紹介しました。宮古諸島では、これまでに8遺跡が確認されており、中でも発掘調査が実施された浦底遺跡、アラフ遺跡、長間底遺跡、島尻・南嶺の長墓遺跡が有名です。また、平成24年度末に発掘された、友利元島では、下層から無土器期と思われる包含層が確認されたという報告もあり、本報告が待たれるところですが、それを加えると、9遺跡となります（久貝ほか2013）。八重山諸島では無土器期の（または、無土器期の可能性がある）遺跡は、51～52遺跡あり（石垣市2009aに新発見の遺跡を追加した数）、遺跡の分布が広がっただけではなく、両諸島の遺跡数を合計すると下田原期の遺跡に比して3倍以上の数となっています。

これらの遺跡の多くは、下田原期にはなかったと考えられる新期砂丘上に形成されています（石垣市2009a）。標高はほとんど5m以下で、波照間島大泊浜貝塚で8m程です。無土器期の

人々は、海浜や河口に面した場所に住み、海に依存した生活をしていたことが想像されます（ただし、新しく発見された白保竿根田原洞穴遺跡の無土器期の年代が得られた包含層は標高30mに近く、これまでのパターンに当てはまりませんが、未だ人工遺物の発見はありません）。

（3）遺構

遺構としては、掘立柱建物跡などの住居跡や、炉跡と考えられる集石遺構などが検出されています。また、無土器期の特徴として挙げられる「焼石調理の痕跡」と考えられる集石遺構も報告されています。

その他、土壙墓が大泊浜貝塚で検出されています（安里ほか2001）。土壙墓は第Ⅳ層中から掘り込まれ、第Ⅴ層の白砂に達しています。埋葬人骨は女性で、両膝が強く折り曲げられた伏臥屈葬で、骨盤の右側に新生児も埋葬されていました。上部が第Ⅲ層によって削られ、遺構の全容（墓を作る際に、どのように掘り込まれたか）は把握されていません。平面観は長さ150cm、幅50cmの楕円形で、人骨の頭部は東南東に向けられています。なお、同遺跡では以前の調査時にも、土壙墓に葬られた埋葬人骨が出土していますが（沖縄県教育委員会1986）、この調査では人骨の帰属を12世紀以降としています。帰属年代に不明な点がありますが、頭位がいわゆる民俗方位の西向きでないことから、若干古手の様相を見せています（島袋2010）。

（4）食糧残滓

食料残滓を見てみると、無土器期にも穀物などを栽培していた痕跡は見つかっていません。遺跡からは下田原期と同様に、貝類や魚類、リュウキュウイノシシなどの骨が出土しています。特に貝類は主要なタンパク源であったと見え、生息域も様々な種類が出土しています。また、爬虫類のカメや哺乳類のジュゴン骨も出土していますが、哺乳類では圧倒的にリュウキュウイノシシの出土量が多く、イノシシが生息していない宮古島の長間底遺跡やアラフ遺跡、竹富島や波照間島の遺跡からも見つかります。また、宮古・八重山両諸島で、オオコウモリの骨も出土しています。また、アラフ遺跡（アラフ遺跡発掘調査団20003）でカエルの骨が多く見つかっていますが、これは遺跡周辺の環境を反映したものと考えられます。

（5）人工遺物

以上、無土器期の人々の生活環境に関わる部分を紹介しましたが、次に人工遺物を概観してみましょう。

1) 石製品

無土器期の遺跡では、石製品、貝製品、骨製品等が見つかっています。特に、他地域との比較において特徴的に捉えられているのは、シャコガイ製貝斧の存在ですが、もっとも多く出土するのは石製品です。

無土器期の石製品は、石斧（図10）や磨石、敲石、石皿、砥石等、組成は下田原期とほとんど変わりませんが、石斧のサイズやバリエーションに変化があり、石包丁や石錘の可能性のある有孔石製品等が新たに加わる傾向があります。無土器期の石斧については、従



図10 崎枝赤崎貝塚出土の石斧

来、大型化するという傾向が考えられてきましたが、高宮廣衛はこれに対し、大型化ではなく、「開元通宝が出現する時期になると再び20cm前後の、あるいはそれ以上の大型のものも若干現れるようになる。ただし、一般的にいわれているような大型化は認められない。つまり、平均値が

増大して20cm前後になるといったような現象は、現在の資料に関する限り認められない」と報告しました（高宮1995）。なお、この傾向は八重山諸島で見られるもので、宮古諸島では全時期を通して石斧の出土例が少ないため、判断するのは困難です。

2) 貝製品

石製品の次に多く出土するのは貝製品です。実用品である刺突具や工具、容器のほか、実用品または装飾品に分類される二枚貝や巻貝等の有孔貝製品が多く出土しています。この時期には、下田原期には見られなかった貝斧（図11）や円盤状製品（図12：シェルディスク）等が出土し始めます。また、先述したシャコガイ製貝斧は、宮古諸島では浦底遺跡（城辺町教育委員会1990）・長間底遺跡（沖縄県教育委員会1984）・アラフ遺跡（アラフ遺跡発掘調査団2003）の発掘調査で出土し、その量は八重山諸島の遺跡よりも多いです。また、出土傾向のみならず、その形態にも両諸島で違いがあります。八重山諸島ではちょうつがい部利用型に限定される傾向にありますが、宮古諸島では放射肋を利用したタイプも見られ、その形態も様々です。このシャコガイ製貝斧が文化の一部として認められるのは、琉球列島では先島諸島だけ。しかし、フィリピンやオセアニアでは早くから確認されていた遺物です。このことが、南方の地域との関係を指摘する大きな根拠となっています。さらに、円盤状製品（シェルディスクまたはその未製品と考えられるもの）も、無土器期の遺跡から出土し始める傾向にあります。同資料は有孔・無孔がありますが、ペンダント等、装身具の可能性が考えられています。フィリピンのDuyong洞穴ではシャコガイ製貝斧と一緒に出土しており（Fox1970）、その用途は装飾品（ペンダント；shell pendantと耳飾り；Cone shell ear ornament）と考えられています。宮古諸島では浦底遺跡（城辺町教育委員会1990）で出土し、八重山諸島では崎枝赤崎貝塚（石垣市教育委員会1987）等から出土しています。安里嗣淳はこれら遺物のセット関係も考慮し、貝斧を作る技術はフィリピンからやってきた可能性が高いと考えています（安里1985, 1993）。

3) その他の製品

その他、骨製品も出土しますが、無土器期の終末には他地域から搬入された遺物も見られるようになります。中国産陶磁器や、徳之島産カムイヤキ、長崎産滑石製石鍋、鉄製品、銭貨が挙げられます。中国産陶磁器には中国産白磁端反碗、白磁玉縁口縁碗、褐釉陶器が含まれ、すべて、大泊浜貝塚（沖縄県教育委員会1986）からの出土です。特に、中国産陶磁器や、徳之島産カムイヤキ、長崎産滑石製石鍋というセット関係は、1978（昭和53）年に発掘された恩納村の熱田貝塚でも確認されており（沖縄県教育委員会1978）、調査を担当した金武正紀は11世紀末～12世紀前半に属するこの遺物が、沖縄諸島のグスク開始期と関係する可能性を指摘しています。八重山諸島でも、無土器期の終末にも同じセットが搬入されたことで、北からの影響により新しい時代に変化していきます。

なお、無土器期の終末からは鉄鑿等の鉄製品も、少量ながら認められます。興味深いものでは、



図11 崎枝赤崎貝塚出土のシャコガイ製貝斧



図12 崎枝赤崎貝塚出土の円盤状製品

中国唐時代に鑄造された開元通寶が複数の遺跡から見つかっています(図13:石垣市教育委員会1987ほか)。同資料がどのような経緯で八重山諸島に入ってきたのかをめぐっては諸説ありますが(木下2000)、いずれにしても無土器期の人々が何らかの形で対外的な交流をしていたことが分かる資料です。



図13 崎枝赤崎貝塚出土の開元通寶

5. 先史時代のまとめにかえて

以上、連載1～4までは、先島諸島の先史時代、特に八重山諸島の先史時代を中心にまとめました。この地域の先史時代は、その源流について明確な答えはありませんが、沖縄本島以北とは異なる文化であることが指摘されています。また、下田原期の分布範囲が北は多良間島から、南は波照間島までの範囲だったものから、無土器期になると宮古島でも見つかると、先島諸島全域に広がります。無土器期の遺跡は八重山諸島のほうが、数は多く見つかっていますが、放射性炭素年代の測定値は宮古諸島のほうが古く出ているという傾向が見られます。これが無土器期の開始期に関係するものなのかは、検討の必要があります。

まだ謎が多い先島諸島の考古学、特に先史文化ですが、2010(平成22)年に発掘調査が実施された白保竿根田原洞穴遺跡の調査(図14)では、「無土器期～下田原期より下位の層位は、土器がまったく伴わない層が複数時期にわたって存在する。多量のイノシシが確認される層、そのさらに下位からは、人骨が主体となって確認される層が存在する。これらの層位の最下層は後期更新世に属する可能性も考えられ、今後、慎重な調査研究が必要となっている」(片桐2010、片桐ほか2012)という成果が得られています。白保竿根田原洞穴遺跡の調査は、まだ継続中です。下田原期より古い人工遺物が発見されるのか、または、未発見の空白期を埋める資料が発見されるのか、今後の成果に期待したいと思います。



図14 白保竿根田原洞穴遺跡調査風景

先島先史時代の人々は、台湾やフィリピンにも近いこの地理的環境に適応しながら、島じまを自由に行き来し、生活を営んでいたと想像されます。その文化は琉球列島の他の地域とも異なるものでした。そして、「北からの影響」を受けて無土器期が終わると、再び土器文化(新里村期;石垣市2009b)が始まります。この土器→無土器→土器という変遷も、全国的にも例のないものです。

次は、これらの時期についてみていきましょう。

<参考・引用文献一覧>

- 安里嗣淳 1985 「沖縄のシャコ貝製貝斧概観」 『琉大史学』 第14号 琉球大学史学会
- 安里嗣淳 1993 「南琉球の原始時代—シャコガイ製貝斧とフィリピン—」 『海洋文化論』 環中国海の民俗と文化 第1巻 凱風社
- 安里進・春成秀爾編 2001 『沖縄県大泊浜貝塚—平成12年度文部科学省科学研究費補助金特定領域研究A（1）—』 考古学資料集27 国立歴史民俗博物館春成研究室
- アラフ遺跡発掘調査団 2003 『アラフ遺跡調査研究Ⅰ—沖縄県宮古島アラフ遺跡発掘調査報告—』 六一書房
- 石垣市 2009a 「有土器から無土器へ—先島諸島先史時代無土器期のくらし—」 『石垣市史考古ビジュアル版』 第3巻 石垣市
- 石垣市教育委員会 1987 『崎枝赤崎貝塚—沖縄県石垣市崎枝赤崎貝塚発掘調査報告書—』 石垣市文化財調査報告書第10号 石垣市教育委員会
- 沖縄県教育委員会 1978 『恩納村熱田貝塚発掘調査ニュース』 沖縄県教育委員会
- 沖縄県教育委員会 1979 『石垣島の遺跡—詳細分布調査報告書—』 沖縄県文化財調査報告書第22集 沖縄県教育委員会
- 沖縄県教育委員会 1984 『宮古城辺町長間底遺跡発掘調査報告』 沖縄県文化財調査報告書第56集 沖縄県教育委員会
- 沖縄県教育委員会 1986 『下田原貝塚・大泊浜貝塚—第1・2・3次発掘調査報告—』 沖縄県文化財調査報告書第74集 沖縄県教育委員会
- 片桐千亜紀 2010 「白保竿根田原洞穴調査の概要（白保竿根田原洞穴発掘調査速報2010）」 『白保竿根田原洞穴を学ぶ会』 白保竿根田原洞穴を学ぶ会実行委員会
- 片桐千亜紀・山崎真治・藤田祐樹 2012 「白保竿根田原洞穴遺跡の発掘調査概要」 『石垣市立八重山博物館紀要』 第21号 石垣市立八重山博物館
- 河名俊男 2009 「石垣島周辺域における下田原期以降、12世紀前半までの自然環境—“未発見の空白期”と無土器期との関連性に関わる試論—」 『石垣市史考古ビジュアル版』 第3巻 石垣市
- 木下尚子 2000 「開元通宝と夜光貝」 高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会編 『琉球・東アジアの人と文化：高宮廣衛先生古稀記念論集』 上巻 高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会
- 久貝弥嗣・本村麻里衣 2013 「2013年度友利元島遺跡発掘調査速報」 『発掘調査が証す歴史津波の実態』 沖縄防災環境学会シンポジウム in 青山学院大学 沖縄防災環境学会
- 城辺町教育委員会 1990 『THE URASOKO SITE（浦底遺跡発掘調査写真集）』 城辺町教育委員会
- 島袋綾野 2010 「墓—現世の思いと後生の住まい—」 『八重山歴史研究会誌』 創刊号 八重山歴史研究会
- 高宮廣衛 1995 「八重山型石斧の基礎的研究（3）—磨面に関する若干の観察—」 『南島考古』 第15号 沖縄考古学会
- Robert B. Fox 1970 : CHAPTERIV DUYONG CAVE:A Stratified Site with a smakk Flake and Blade Industry and Neolithic Assemblages. *The Tabon Caves*. National Museum MANILA